

Vanity Fair
—関係代名詞の選択について—*

山 本 史 歩 子

1. はじめに

後期近代英語の研究は、北欧の大学（フィンランドの University of Helsinki、スウェーデンの Uppsala University）、オランダの Leiden University などを中心となって行われてきた歴史がある。日本国内でも、文体論において伝統的に研究がなされてきたが、近年、語学的、歴史社会言語学的、歴史語用論的観点から、後期近代英語の研究が注目を浴びつつある。

後期近代英語は、古英語・中英語・初期近代英語とは異なり、現代英語とほぼ変わらないという漠然とした認識により、興味をそそられる研究対象になりえず、英語史研究の中に埋もれてしまう傾向にあったと言える。加えて、18世紀・19世紀は、語学的研究の対象よりむしろ文学の研究対象としては最高の時代である。実際、散文では、Jonathan Swift, Joseph Addison, Henry Fielding, Jane Austen、ヴィクトリア朝時代に入ると、Charles Dickens, William Makepeace Thackeray, Brontë 姉妹など、韻文では、Alexander Pope, Thomas Gray, Robert Burns、ロマン派と呼ばれる詩人たち、William Wordsworth, Percy B. Shelly, John Keats など枚挙にいとまがない。後期近代英語の文学作品は質・量ともに、現代も含めて文学史上群を抜いていることは誰もが認めるであろう。しかしながら、語学的観点から、『ナルニア国物語』の著者である、C.S. Lewis (2013 [1960]: 311-312) は、大変興味深い指摘をしている。

Indeed I am ashamed to remember for how many years, as a boy and a young man, I read nineteenth-century fiction without noticing how often its language differed from ours. I believe it was work on far earlier English that first opened my eyes: for there a man is not easily deceived into thinking he understands when he does not.

本稿では、ヴィクトリア朝時代を代表する作家の1人、William Makepeace Thackeray の *Vanity Fair* における関係代名詞と先行詞（人）との関係を登場人物と19世紀のイギリス社会・文化・風俗など歴史社会言語学の観点から分析を行い、Thackeray がどのように登場人物の心情を関係代

名詞で表現していたかを明らかにすることを目的とする。*Vanity Fair* は、当時の上流中産階級に属する人間たちの人生模様を織り成す作品であり、彼らの滑稽・悲哀・嫉妬などがあるのままだに描かれている。Gordon (1955: 388, 394) は、*Vanity Fair* には Thackeray の特徴である、「現実主義の確立」(its establishment of realism) と「真実にせまる文体のこだわり」(its assertion of the natural style) が織り込まれていると指摘している。小説のスタイルを取りながら、一方で社会の現実を追求する姿勢は、登場人物のこぼれにも反映されていると考えられる。この点について、Gordon (1955: 397) は、“His real triumph comes in his ability to differentiate the speech of educated characters who pretend to some degree of cultivation.” と述べている。また、Phillipps (1978: 98) も、“... Thackeray reflects the reality of nineteenth-century upper-class speech more faithfully, if less amusingly, than the distorting mirror of Dickens does.” と指摘している。関係代名詞の選択には、社会的要因が深く関わっており (Phillipps 1970; Wright 1994; 山本 2017)、テキストに *Vanity Fair* を、分析対象に関係代名詞を選択したことは妥当であると言える。なお、本稿では Ridley (1975 [1961]) 版のテキストを使用する。

2. William Makepeace Thackeray

William M. Thackeray は、1811年にインドのカルカッタに生まれる。¹⁾ 所謂 Anglo-Indian である。父 Richard は、東インド会社の職員として働いていたが、その父である William も、東インド会社に勤め一財産を築いた。実父である Richard が死ぬと、母 Anne Becher が再婚したため、William は 1817 年単身イギリスに帰国し、その後祖母の下で教育を受けることになる。Thackeray は、Cambridge 大学の Trinity College に入学するが、放蕩が過ぎて 2 年で中退をする。1834 年から、*Frazer's Magazine* や *PUNCH* などに ‘periodical journalist’ としてペンネームで寄稿をしながら、1847 年、*Vanity Fair* を出版する。これにより、Dickens と並び称される偉大な作家仲間入りを果たす。分冊という形式で毎月数章ずつ刊行され (1847 年 1 月から 1848 年 7 月まで)、その後単行本として再出版された。出版当初は、作品に対する読者の反応は冷たいものであり、評判は芳しくなかったと言われているが (Taylor 2018[1864]: 102; Melville 2015 [1899]: 225; Gordon 1955: 384)、やがてはその作品の質は当時の high society, or ‘literally class’ で高い評価を獲得していくことになる (Melville 2015 [1899]: 226)。*Vanity Fair* には *A Novel without a Hero* という副題がついており、もともとは副題がメインタイトルであったが、Thackeray は真夜中に突然 ‘Vanity Fair’ というタイトルを思いつき、これを大変気に入って本のタイトルにしたと言われている (Gordon 1955: 385)。ついでながら、当時 *Vanity Fair* は 6,000 部ほどしか売れなかったが、Dickens の作品はどれも 20,000 部から 25,000 部ほどコンスタントに売れていた (詳しくは、Melville (2015 [1899]: 226) を参照)。Dickens の作品は広い読者層に支持されていたということが、販売部数に反映され

ている。

19世紀当時から現代においても、ThackerayとDickensは常に比較の対象であった。Ridley (1975: vi-vii) は、ThackerayとDickensの違いを次のように明確に指摘している。

Dickens, ..., was a fiery crusader, attacking, with a fury sometimes almost daemonic, oppression and cruelty whenever he saw them and also specific current abuse, debtors' prisons, the delays of Chancery, the Circumlocution Office, slums, atrocious schools. He aimed at the heart of the great British public, rather than its head; and he hit it. Thackeray was neither fiery nor a crusader. He was as earnestly convinced as Dickens that the novelist had a duty to society, but his object of attack was not this or that specific abuse, but a whole false attitude towards life. (...) One can read Dickens with enjoyment by surrendering to his storming attack on the emotions, but one cannot read Thackeray with any sort of just appreciation unless one is prepared to make some exercise of the intellect.

Phillipps (1978) も、両者の違いについて次のように記述している。

The travellers' room at the White House Cellar is part of 'the world which is not London, but which London has stimulated Dicken's fancy to create' (...) Thackeray's London, however, is London. (p. 18)

Dickensの描くLondonは、Dicken's Londonであり、Thackerayの描くLondonは、Londonということである。Thackerayは、fictionの中にnon-fictionの要素を取り入れることで、より写實的に物語を紡ぐことこそが、小説家の使命だと理解していたと思われる。Thackeray自身、1851年5月David Massonに宛てた書簡の中で、'nature'という語を用いて、Dickensには、'nature'が適切に表現されていないと述べている(Harden 1994)。

I think Mr. Dickens has in many things quite a divine genius so to speak, and certain notes in his song are so delightful and admirable, that I should never think of trying to imitate him, only hold my tongue and admire him. I quarrel with his Art in many respects: wh^h. I don't think represents nature duly; for instance Micawber appears to me an exaggeration of a man, as his name of a name. (...) it is no more a real man than my friend Punch is. (...) – holding that the Art of Novels is to represent nature: to convey as strongly as possible the sentiment of reality...(pp. 410-411)

‘Nature’ という語は多義であるが、書簡の内容から「現実在即した心情、換言すれば万物の本質」であると推察される。Phillipps (1978: 20-21) は、Thackeray の作家としての信条のヒントとなる重要なキーワード ‘knowing’ を提示している。OED (knowing ppl. a.4) によると、この語が最初に使用されたのは、Jane Austen の *Sense and Sensibility* で、19 世紀の意味は、‘showing knowledge of “what is what” in fashion, dress, and the like; stylish, smart’ と定義されており、現代英語より広い意味を有している (*Oxford Advanced Learner’s Dictionary*, 8th edition (2010) では、‘knowing’ は ‘showing that you know or understand about something that is supposed to be secret’ と定義されている)。Non-fiction の世界で筆を走らせた ‘periodical journalist’ としての経験から培った ‘nature’ や ‘knowingness’ は、小説の世界でも彼が見た 19 世紀前半のイギリス社会の真の姿を忠実かつ冷静に描写しようとしたことと深く関係していると言える。

Vanity Fair の成功の後、*The History of Pendennis* (1848-1847)、*The History of Henry Esmond Esq.* (1852)、*The Newcomes* (1853-1855)、*The Virginians* (1857-1859) を次々と発表をし、ヴィクトリア朝時代を代表する作家として活躍をするが、1863 年 12 月 24 日、52 歳という若さでこの世を去る。同世代の友人であり、ライバルでもあった Dickens は、1864 年 2 月、*Cornhill Magazine* に Thackeray の追悼文を寄稿している。次に一部抜粋を示す。

We had our differences of opinion. (...) In no pages could I take it upon myself at this time to discourse of his books, of his refined knowledge of character, of his subtle acquaintance with the weakness of human nature, of his delightful playfulness as an essayist, of his quaint and touching ballads, of his mastery over the English language. (1864 *Cornhill Magazine*, cited in Tillotson and Hawes, 2014: 321-323)

この箇所の中で、Dickens は繰り返し of NP を使用することで一定のリズムを生み出し、Thackeray への惜しめない賞賛を軽やかに表現しているだけでなく、このような反復手法は、Thackeray の特徴でもあったので、同時に homage になっていると思われる。Thackeray は、同じ語・句を反復させることで、物語にスピード感、クレッシェンドを生みだすことができる稀有な作家であったと言われている (Phillipps 1978: 36-38)。

3. *Vanity Fair* と 19 世紀のイギリス

Vanity Fair は「虚栄の市」で、もがきながら生きる「上流中産階級」(upper-middle class) の人々の日常、ありのままの姿を描いた作品である。形式は、人形芝居であり、その興行主として Thackeray が語りながら物語が進行していく。この作品に登場する人物は人の姿をした操り人形で

ある。換言すれば、いかようにも Thackeray が操作することができるということである ((1), (2)を参照)。人形芝居の興行主がいつの間にか、この物語の作者として読者に語りかけるのである。

(1) Being an invalid, Joseph Sedley contented himself with a bottle of claret besides his Madeira at dinner, and he managed a couple of plates full of strawberries and cream, and twenty-four little rout cakes that were lying neglected in a plate near him, and certainly (for novelists have the privilege of knowing everything...(VF: 26)

(2) The novelist, it has been said before, knows everything,... (ibid.: 361)

Vanity Fair は、生まれも育ちも全く異なる2人の女性 Rebecca (Becky) Sharp と Amelia Sedley の波瀾に富んだ人生が main plot となっている。Becky は、貧しい画家とオペラハウスの踊り子(母はフランス人)を両親に持ち、幼い頃から19世紀初頭のイギリス社会の弱者に対する冷たく容赦のない態度を身に染みて生きてきた。ゆえに、自分を見下した人たちを手玉にとりながら、手段を選ばず上流社会にのし上がろうとする野心的な女性として描かれている。一方の Amelia は、父親は株式仲買人をしている比較的裕福な家庭に生まれ、何不自由なく育てられた純真無垢な女性として描かれている。これだけを見れば、前者は悪で後者は善という単純な構図になってしまうが、実際には、悪の中に善が顔を出し、善の中に悪や偽善が顔を出すという人間の業が冷静に描写されている。

具体的に、(3)では、お金がない Becky は夫ある身にもかかわらず、色香で手玉にとっている Steyne 伯爵の家からパーティーを開くために必要な料理やワインを我が物顔で調達していることに対して、身分あるご婦人方から Becky は罵られるのだが、Thackeray は、Becky を擁護している。(4)では、Amelia の身の上に起きた痛ましい現状を、Thackeray はこの手の話は退屈極まりないものとして冷ややかに切り捨てている。その痛ましい現状とは、Amelia の最愛の夫である George の戦死 (Amelia と George は幼い頃からの許嫁同士であるが、George は Waterloo Campaign で戦死してしまう)²⁾、その後未亡人となった Amelia は、父親の破産や一人息子との別れ (George の父親である Mr. Osborne に親権を奪われてしまう) を経験し、過去の栄光にしがみついた年離れた父親の世話で、心身ともに疲れ果てている姿が描かれている。読者は Becky の狡猾な行為に怒り募らせ、Amelia の身の上に起きた悲劇に同情をしまいそうになるが、そうはさせないのが Thackeray なのである。読者が登場人物に共感しないように (小説ではあるが、同時に 'nature' の存在も忘れてはならない)、Thackeray がタイミングよく顔を出して、冷静さを読者に取り戻させるのである。つまり、Thackeray は、登場人物を感情移入の対象としての生身の個として表現するのではなく、社会を映す鏡として表現しようとしていたと思われる。

(3) I protest it is quite shameful in the world to abuse a simple creature, as people of her time abuse

Becky, and I warn the public against believing one-tenth of the stories against her. (*VF*: 511)

- (4) I know that the account of this kind of solitary imprisonment is insufferably tedious, unless there is some cheerful or humorous incident to enliven it—... (ibid.: 577)

この点において、*Jane Eyre* の作者である Charlotte Brontë は、Thackeray の感情に左右されない冷静な表現力に最大の賛辞を贈っている。³⁾

Thackeray is a Titan, so strong that he can afford to perform with calm the most herculean feats; there is a charm and majesty of repose in his great efforts; he knows nothing from fever, his is never the energy of delirium—his energy is same energy, deliberate energy, thoughtful energy. The last number of ‘Vanity Fair’ proves this peculiarly. (1932 *The Shakespeare Head Brontë, The Life and Letters*, cited in Tillotson and Hawes, 2014: 51)

(5)は、Becky の独白とそれに対する Thackeray の考えが見事にリンクしている場面である。Becky はお金さえあれば、善良な女性にだってなれるし、良き妻・母にだってなれると思っている。Thackeray は、Becky と立派な女性の差は単にお金があるかないかであることを誰が反論できようかと Becky の考えに同調している。この物語は副題が示すように、単純に善悪で割り切れないのである。

- (5) “It isn’t difficult to be a country gentleman’s wife,” Rebecca thought. “I think I could be a good woman if I had five thousand a year. I could dawdle about in the nursery and count the apricots on the wall. I could water plants in a green-house and pick off dead leaves from the geraniums. I could ask old women about their rheumatisms and order half-a-crown’s worth of soup for the poor. I shouldn’t miss it much, out of five thousand a year. I could even drive out ten miles to dine at a neighbour’s, and dress in the fashions of the year before last. I could go to church and keep awake in the great family pew, or go to sleep behind the curtains, with my veil down, if I only had practice. I could pay everybody, if I had but the money. This is what the conjurors here pride themselves upon doing. They look down with pity upon us miserable sinners who have none. They think themselves generous if they give our children a five-pound note, and us contemptible if we are without one.” And who knows but Rebecca was right in her speculations—and that it was only a question of money and fortune which made the difference between her and an honest woman? (*VF*.: 423)

19 世紀の幕開けは輝かしいものであった。ナポレオンとの戦争に勝利し、イギリスは大国とし

ての地位を国の内外に認めさせ、政治は George 3 世と皇太子である George 4 世が摂政としてあつた。しかしながら、その栄光の陰で拡大していく貧富の差・子どもの権利に対する無関心・病気の蔓延・環境汚染とありとあらゆる人災が弱者を襲った時代でもある。18 世紀後半から始まった産業革命により機械化が進み多くの製品の大量生産が実現する、すなわち資本主義の台頭である。当時、イギリスには手職工が多くいたが、機械化の波にのまれ職を失い、過酷な環境下での労働を強いられることになっていく。男性ばかりではなく、幼い子どもや女性までもが生活のため労働者としてただ同然の賃金で長時間劣悪な工場の中で働いた。工場内は清掃もされず不潔で多くの子どもがその小さな体を機械の下に入れて黙々と部品が落ちてこないように見張る仕事を強制させられた。工場による大気汚染で都市部の空は常に曇っており、河川からも汚染が広がり、悪臭を放つ川の水を飲み、洗濯をした労働者たちの暮らしは、筆舌に尽くし難い。当時の工業都市の 1 つであるリバプールの男性の平均寿命は 20 歳とも 30 歳と言われる。また、1815 年に制定された「穀物法」により、国外の安い穀物の輸入が禁止となり、民衆は国内の高い穀物を買わざるを得ない状況に追い込まれ、慢性的な飢饉に曝された。これは、地方に広大な土地を所有していた上流階級の gentry たちの既得権を守るための法である。⁴⁾

このような時代に、民衆の希望の光となったのが、1559 年、25 歳の若さでイギリスの女王となったエリザベス 1 世の再来と謳われたヴィクトリア女王の誕生 (1837-1901) である。ヴィクトリア女王は、わずか 18 歳で即位した。ヴィクトリア女王の在位期間である 1851 年に世界最初の万国博覧会がロンドンで開かれ、1870 年に現在の義務教育のもととなる「初等教育法」が制定されるが、イギリス国内の経済は停滞したままであり、労働者階級の生活に顕著な向上は実現されなかった。⁵⁾

4. *Vanity Fair* における関係代名詞

4.1 規範文法と関係代名詞

規範文法とは、規範文法家と呼ばれる個人が独自に自らの信念のもと、ラテン語の文法をもとに英語を規範化した文法書である。⁶⁾ 権威ある規範文法家が執筆した文法書から逸脱した英語は当時の人々にとって時には致命的な社会的ミスとなりうることもあったと考えられる。規範文法書に従って書簡を書く、書類を作成することは、より高みを目指す裕福な商人たちにとって必要不可欠な教養の 1 つであると同時に、そのような迫りくる新興階級とは差別化を狙う上流階級の人たちにとっても重要な存在であったと推察される (Tieken-Booth van Ostade 2011: 2; Yáñez-Bouza 2018: 30; 山本 2018: 166)。

規範文法書の誕生の経緯には、イギリスでは、イタリアのクルスカ・アカデミー (Accademia della Crusca 1582 年設立) やフランスのフランス・アカデミー (Académie française 1635 年設立) のような自国の言語の純粋化を目的とするアカデミーの設立が実現しなかったため、個人が英語を

規範化する必要があったことが要因の1つに挙げられる (Tieken-Boon von Ostade 2008: 4-5)。⁷⁾

現代英語では、関係代名詞の選択は先行詞が人と人以外、あるいは生起する環境によって異なる。18世紀の規範文法家、Lowth (1995: [1763]) は次のように定めている。

The relatives who, which, that, having no variation of gender or number, cannot but agree with their antecedents. Who is appropriate to persons... and we apply which now to things only:... That is used indifferently both of persons and things: but perhaps would be more properly confined to the latter. (pp. 146-147)

The Relative is often understood, or omitted: as, “The Man I love;” that is, “whom I love.” The accuracy and clearness of the Sentence depend very much upon the proper and determinate use of the Relative, so that it may readily present its Antecedent to the mind of the hearer, or reader, without any obscurity or ambiguity. (pp. 150-151)

18世紀の規範文法では、先行詞が人には、who, whom の使用が推奨されており、that は、人・人以外にも可能であると認めつつ、後者への使用がより適切であると明記している。また関係代名詞の省略は「正確さ・明確さの欠如」の点において、好ましくない用法であることが分かる。山本 (2017: 13) は、*the Female Spectator* の関係代名詞を分析した結果、先行詞の人物が好ましくない場合、who ではなく that が使用される傾向が確認されると指摘している(6)。

(6) Passions were given us to invigorate the Mind, and rouse us to noble and great Actions; and he *that* is born without them, or mortifies them too much, is incapable of doing any thing to serve his God, his Country, or himself. (1744 *The Female Spectator*, 山本, 2017: 12)

最後に、*Vanity Fair* の舞台は19世紀前半、書かれたのは1846年から1847年であるので、Lowth から33年後に出版された Lindley Murray の *English Grammar* (1795) を参考にしたと考えられるが (Tieken-Boon van Ostade 2011: 8)、Murray は Lowth を尊敬しており、幾つかの文法項目において Lowth から明らかな引用をしている (Lowth と Murray の関係詞・否定辞・動名詞などの説明箇所及び例文を参照)。⁸⁾

4.2 *Vanity Fair* における関係代名詞

分析結果を考察する前に、*Vanity Fair* における興味深い関係代名詞の使用について言及をおきたい。次例参照。

- (7) a. Of course, they did not intend to occupy permanently an apartment so splendid. It was in order to let the house again *that* Raggles purchased *it*. (*VF*:369)
- b. There's a man at Bayswater got one with such a nose *that* you might– I mark the king and play –that you might hang your hat on *it*. (*ibid.*: 376)
- c. Little Lord Southdown, the best-natured of men, who would make you a present of the hat from his head, and whose main occupation in life was to buy knick-knacks *that* he might give *them* away afterwards,...(*ibid.*: 380)

(7a~c) は、代名詞が重複している例である。Phillipps (1978: 108) は、このような代名詞を「過剰な人称代名詞」(redundant personal pronoun) と呼んでいるが、実際には、人称代名詞以外でも認められる。また、Phillipps は、この用法を文法的な誤りではなく「過度に故意的な文法」(too-elaborate syntax) と認識している。⁹⁾ *Vanity Fair* では、上記の3例しか確認されず、全て Thackeray の語りで生起している。これらを一過性の非標準的用法、あるいは、関係代名詞 *that* と *that*-節との混同という解釈も可能と思われるが(名詞節を導く *that*-節との混同については、Rissanen 1984: 420 を参照)、*The Newcomes* では *which* が用いられているので、混同とは一概には言えない(注9を参照)。少なくとも、(7b) に関する限り、先行詞と関係詞節との間に節が挿入されており(– I mark the king and play –) 両者の間に距離が発生したことで、構文の明確さが損なわれるのを恐れて、代名詞を生起させることで読者に明確さを示したものであると推察される。

- (8) My dear, Miss Crawley has arrived with her fat horses, fat servants, fat spaniel–the great rich Miss Crawley, with seventy thousand pounds in the five per cents., whom, or I had better say *which*, her two brothers adore. (*VF*: 94)

Phillipps (1978: 122) によれば、(8)は、准男爵の Sir Pitt Crawley と弟の the Reverend Bute Crawley の義理の姉である Miss Crawley に対する2人の本心を関係代名詞で皮肉たっぷりに描いている例である。イタリック体で表現されている *which* が見事である。

- (9) What a number of them he had; and what a noble way of entertaining them. How witty people used to be here *who* were morose when they got out of the door; and how courteous and friendly men *who* slandered and hated each other everywhere else! He was pompous, but with such a cook what would one not swallow? he was rather dull, perhaps, but would not such wine make any conversation pleasant? (*VF*: 157)
- (10) If there is any exhibition in all Vanity Fair which Satire and Sentiment can visit arm in arm together; where you light on the strangest contrasts laughable and tearful: where you may be

gentle and pathetic, or savage and cynical with perfect propriety:... (ibid: 156)

Phillipps (1978: 37) は、(9)の how で始まる文について（先行の文では関係代名詞 who は先行詞 witty people から離れているが、後行の文では先行詞 courteous and friendly men と関係代名詞 who は隣接している）、両構文をリズムよく対照させることで、“the soothing effect of wealth, good food and good wine in removing of discord” の効果を指摘している。しかしながら、(9)を理解するには、(10)を知る必要がある。 (9)は第 17 章に現れるが、その章は(10)で始まる（17 章冒頭の(10)の次のパラグラフに(9)が現れる）。「虚栄の市」では、皮肉と感傷がペアになって訪れる。この相反する両者を先行詞と関係詞の距離に置き換えて表現しているとも解釈が可能である。前者の距離は不和（or satire）を表し、後者の距離は調和（or sentiment）を示している。

4.3 分析

本章では、語り手である Thackeray を中心に主要な登場人物がどのように関係代名詞を選択しているか、頻度分析を行う。その結果を表 1 に示す。¹⁰⁾ 表 1 の登場人物について、簡単に説明をしておく必要がある。Becky、Amelia、George については第 3 章を参照。Dobbin は、大尉であり、Amelia の夫である George の子どもの頃からの親友であるが、密かに Amelia を George よりも深く愛してしまう。商人の息子で家は裕福である。George の父親である Mr. Osborne は、the City で手広く商売をしている実業家である。Rawdon は、Becky が家庭教師として雇われた准男爵の Sir Pitt Crawley の次男であり、後に Becky と結婚をする。Rawdon は Eton 校と Cambridge 大学で（2 年で退学するが）教育を受けているが、earliest でさえまともに綴ることさがない人物である。¹¹⁾

Thackeray は、先行詞が人の場合、who と whom を圧倒的に使用している。登場人物の中で、もっとも当時の規範文法に従って関係代名詞を選択している。物語の作者であり、人形劇の興行主という役割を考慮すれば、当然の結果である。興味深いのは、次いで、Becky に適切な使用が認められることである。表 1 の人物の中で、当時の一般的な中流家庭の教育を受けていないのが、Becky と Mr. Osborne である。¹²⁾ Becky は言葉使いに対して、誰よりも注意を払っていることが分かる。その理由は、Becky は上流階級にのし上がるため、周囲の人に自分の言動を馬鹿にされないように人一倍努力をした結果が表れていると推察される。

表1 WHO, WHOM, THAT, Ø 関係代名詞の選択 (先行詞が人)

	WHO	WHOM	THAT	Ø	Total
Thackeray	597 (75.4%)	173 (3) (21.8%)	10 (1.3%)	12 (1.5%)	792
Becky	25 (73.5%)	6 (17.6%)	1 (2.9%)	2 (6%)	34
Amelia	2 (50%)	1 (25%)	0	1 (25%)	4
Dobbin	11 (52.4%)	5 (23.8%)	2 (9.5%)	3 (14.3%)	21
George	7 (70%)	1 (10%)	1 (10%)	1 (10%)	10
Rawdon	0	2 (1) (100%)	0	0	2
Mr. Osborne	2 (66.7%)	0	0	1 (33.3%)	3

- (11) a. A black servant, *who* reposed on the box beside the fat coachman, uncurled his bandy legs as soon as the equipage drew up opposite Miss Pinkerton's shining brass plate, and... (VF: 5)
- b. Jos slept on until long after dark, when he woke up with a start at the motions of his servant, *who* was removing and emptying the decanters on the table; and... (ibid.: 252)
- c. *Now* I am friendless and alone; yesterday I was at home, in the sweet company of a sister, *whom* I shall ever, ever cherish! (ibid.: 69)
- d. I wonder, does he wear a star? "thought she," or is it only lords *that* wear stars? (ibid.: 63)
- e. Are you the little girl *that* George Osborne said should marry him? (ibid.: 48)
- f. Miss Sedley is one of the most charming young women *that* ever lived. (ibid.: 112)
- g. Who's this little schoolgirl *that* is ogling and making love to him? (ibid.: 58)

(11a,b) は、Thackeray の語りのパートである。召使いに対しても *who* を使用している。(11c,d) は Becky の台詞である。(11c) は、Amelia への書簡で、先行詞 a sister は Amelia であるので、当然 *whom* が使用されているが、(11d) は、先行詞が lords であるにもかかわらず *that* が認められる。これは、Becky の独白であるので、インフォーマルな *that* が使用されていると考えられる。(11e,f) は、Dobbin の台詞であるが、この時まで Amelia は (the little girl は Amelia を指す)、Dobbin の記憶の中では純真無垢な幼い女の子のままであったので (Dobbin と George は子どもの頃からの親友で、Amelia と George も子どもの頃からの許嫁同士)、子どもに対する *that* が使用されている (Priestley 2015 [1772]: 98-99)。(11f) も、先行詞は Amelia である。この場面は、George の軍隊仲間たちが George の女性関係について、根も葉もないわさを面白おかしく話しているのに我慢ができず、George 本人からは婚約者の Amelia のことを内緒にしておくと言われていたにもかかわらず、Dobbin が、つい George には Amelia という素晴らしい女性がいるのだと感情的に言い放ってしまうのである。Dobbin が Amelia に片思いしていることは明白である。最上級 the most charming woman が用いられているので、余計に Dobbin の哀れさが伝わる一文である。文法的には最上級とよく共起する *that* が選択されている。¹³⁾ 最後に (11g) は、George の台詞である。先行

詞の *this little schoolgirl* は、Becky を指している（この時期、Becky は Chiswick Mall の女学校を出たばかりとなっているが、正規の学生ではなく、年期契約の学生であり、実際には、幼い生徒の面倒をみたり、母親がフランス人であったので、フランス語を女学生たちに教えたりすることで、学校にいることを許されていた）。これは、Amelia の兄である Jos が調子に乗って大酒を飲んだ挙句、喧嘩をして一緒にいた George に大恥をかかせたことに怒り心頭になっている場面での George の発言である。Jos に色目を使って、何とかプロポーズをさせようと画策する、換言すれば身分不相応な振る舞いをする Becky を見下していると同時に、Jos の一件で八つ当たりをしている。

- (12) a. “I should have known you anywhere,” she continued; “a woman never forgets some things. And you were the first man I ever—I ever saw.” (VF: 662)
- b. You must have a husband, you fool; and one of the best gentlemen I ever saw has offered you a hundred times, and you have rejected him, you silly, heartless, ungrateful little creature! (ibid.: 691-692)
- c. Now is the time to be of service to her. The oldest friend I ever had, and not—” (ibid.: 673)
- d. “Very well? By Gad, sir, she’s the finest lady I ever met in my life,” bounced out the Major. (ibid.: 665)
- e. And this famous dandy of Windsor and Hyde Park went off on his campaign with a kit as modest as that of a sergeant, and with something like a prayer on his lips for the woman he was leaving. (ibid. 291)
- f. ...and I like him for marrying the girl he has chosen. (ibid.: 195)

(12a~f) は、先行詞は人で、関係代名詞が省略されている例である。(12a,b) は、Becky の台詞である。文法上、限定詞 *first* と最上級がそれぞれ先行詞に生起していることにより、関係代名詞が省略されている（注 13 を参照）。(12a) の発言の意図については、以下の (12d) の例と関連しているので、そこで一緒に考察をする。(12b) は、Amelia が亡き夫である George を想い、Dobbin の愛を頑なに拒み続ける態度に Becky が業を煮やして、Amelia にかに愚かな行為であるか Becky らしい忠告を与えている場面である。Dobbin と結婚させるため、自分を悪女と蔑む Dobbin を *one of the best gentlemen I ever saw* と敵に最上級の賛辞を贈ってまで説得をしている。Becky は、かつて Amelia の目前で George を誘惑した過去があるが、ここでは心から Amelia の行く末を案じている。(12c) は、Amelia の台詞である。Amelia は Dobbin に対して Becky のことを *the oldest friend* であるときっぱり答えている。Amelia のお人よしで *naïve* な側面が示されている。¹⁴⁾ (12d) は、Dobbin の Jos に対する発言で、一見すると純粹に Amelia に対する賛辞のようにも解釈できる (*the finest lady* は Amelia を指す)。まず、この発言を理解するには過去に遡る必要がある。Jos は遠い昔、Becky に結婚を申し込む直前までいった経緯があり、今でも憎からず想っているのである。その

Becky と偶然出会い、Becky が困っていることを知り、何とか助けてあげたいと恐る恐る Dobbin に申し出るのが、Becky の今までの悪行を知っている Dobbin は猛反対をする。Dobbin は、Jos を説得できなかつたので、Amelia に判断を仰ごうと提案をする。Amelia は Becky に裏切られた過去があるので、一緒になって反対をしてくれると勝手に思っているのである。その Becky (Dobbin は 'the little minx' と表現している) と比較していかに Amelia が淑女であるかを声高に、まるで自分の妻であるかのように述べている滑稽な場面と解釈できる ((11f) を参照)。その滑稽さが最上級で示されている。(12a) は (12d) のやりとりの原因となった Becky の発言である。単純でつまらないがお金だけは持っている Jos に対して、「あなたは私が初めて出会った立派な紳士であったのですから」と最上級を巧みに利用して Jos を自分の言いなりにさせようとする Becky の狡猾な性格の一端が表現されている。(12e) は、Thackeray の語りである。かつては dandy と持て囃された Rawdon が、戦争に行く間際に愛する Becky に祈りをささげている健気な場面であるが(先行詞 the woman は Becky を指す)、Rawdon 以外の人には、Becky はどのように映っているのだろうか。Becky の悪行を考慮すれば、特段の配慮を必要としない人物なのかもしれない。(12f) は、George が Amelia に話しかけている場面である。会話の中で、お金はあるが教養のない商人たちがいかに愚かしい人種であるか Amelia に言って聞かせている。そのような拝金主義の社会で持参金を持たない Becky と結婚をした Rawdon の男気に敬意を示している。しかしながら、省略を使用している理由として2つ考えられる。1つは、George 自身 Rawdon 同様に、高い教育を受けているが教養に欠けている人物であること。もう1つは、先行詞が Becky であること。准男爵の子息である Rawdon に対する態度と身分の低い Becky に対する態度の差が示されている。

次の表は、関係代名詞の省略と先行詞の人・人以外の関係を示したものである。表2から、どの人物も人に対しては省略を避ける傾向が認められるが、これは人に対する礼節が適切に示されていると言える。表1の先行詞が人の場合と同様に、Thackeray に最も近い使用が確認されるのは Mr. Osborne を除けば、Becky であるのは興味深い。Becky がもっとも低い階級に属しているが、彼女の野心が当時の規範文法に従わせると考えられる。予想外ではあるが、Rawdon に人が先行詞の場合、関係代名詞の省略は1例も認められない。恐らく、深い教養は有してはいないが、准男爵の息子である育ちの良さが散発的に表出しているものと思われる。

表2 Ø 関係代名詞の選択 (先行詞が人と人以外)

	Ø (人)	Ø (人以外)	Total
Thackeray	12 (12.6%)	83 (87.4%)	95
Becky	2 (15.4%)	11 (84.6%)	13
Amelia	1 (50%)	1 (50%)	2
Dobbin	3 (30%)	7 (70%)	10
George	1 (25%)	3 (75%)	4
Rawdon	0 (0%)	5 (100%)	5
Mr. Osborne	1 (14.3%)	6 (85.7%)	7

5. 終わりに

本稿では、Thackeray の *Vanity Fair* をもとに、先行詞が人の場合に焦点を当て、先行詞になっている人物と発話者の人間関係が、どのように発話者の関係代名詞の選択に影響を及ぼしているか社会言語学の観点から分析を行った。その結果、各登場人物の生まれや野望・当時の社会や規律・会話のトピック・対話者同士の社会的関係や会話場面の状況などが、関係代名詞の選択に関係していることを提示した。

後期近代英語の作品の多くがすでにコーパス化されているので、コーパスを用いて量的分析をすることも1つの利点であると言える。しかしながら、一方で、テキストを深く読み込み、登場人物の心理状態、経済的・教育的背景、性格、登場人物が属するサークルなど社会言語学的な側面も考慮しながら分析をすることも重要であり、コーパスとは異なる有様を見せてくれると提唱したい。今後は、テキストの質的分析とコーパスの量的分析の両者併用の研究が重要になってくると思われる。

今後の課題として、Thackeray の包括的な研究のために他の作品についても分析をする必要がある。本稿では、テキストだけを分析対象としたが、同時代を反映するコーパスとの併用も視野に入れて分析を進めたい。

最後に、後期近代英語研究の対象は、1695年に the Licensing of the Press Act が廃止されたことで、政府の検閲から解放され自由に発行可能となった新聞 (the *Daily Courant*, the *Observer*, the *Times*, etc.)、また本と比べて安く入手できる著名な作家たちによる定期刊行物 (periodicals) (the *Examiner* by Swift, the *Spectator* by Addison, etc.)、小説 (*Robinson Crusoe* by Defoe, *Pride and Prejudice* by Austen, *Oliver Twist* by Dickens, etc.)、Samuel Johnson や James Murray が手掛けた本格的な英語辞書とかなり幅広い。更に、規範文法と呼ばれる文法書や usage guide (詳しくは、Tieken-Boon van Ostade 2018 を参照) と呼ばれる、より実践的な文法書が台頭してきたのもこの時代である。また、規範文法の到来とともに英語の長い歴史の中でようやく標準化の最終段階に到達し、現代英語へと発達する移行期にも当たる。これほど、興味深い時代の英語が未だ十分に研究されつくされてはおらず、この時代の研究の更なる発展を期待したい。

* 本稿を作成するにあたり、田辺春美先生から大変有益なコメントをいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

注

- ¹⁾ Thackeray が生まれた翌年、1812年に Thackeray の良き友人かつ、ライバルとなる Charles Dickens が誕生する。
- ²⁾ *Vanity Fair* は、19世紀前半、Waterloo Campaign (1815年6月開戦) の前後が舞台となっている。当時の

資料によると (ブリタニカ国際百科事典電子辞書: 2010)、1815年6月18日、ナポレオン軍12万5千と、ウェリントン侯爵率いるイギリス軍9万5千とプロシア軍12万の連合軍は、ベルギーのWaterlooで激突をし、連合軍が勝利を取めた。フランス軍の死者4万に対して、イギリス軍1万5千、プロシア軍7千とされている。 *Vanity Fair* では、Thackeray は、開戦前夜までイギリス上流階級の間人たちが戦争のさなか、夜会を開きお祭り騒ぎをしていたことを皮肉たっぷりに描いている。彼らの予想を遥かに超えてフランス軍がベルギーまで攻め入った際には、逃げるために、なりふり構わず互いに馬車を奪い合う姿が滑稽に描かれている。ある伯爵夫人は逃げる際にダイヤモンドをこっそりと乗馬服に縫い込む姿がしっかりと Thackeray に暴露されている。伯爵夫人らしからぬ行為は読者に対して何を伝えたいのか、人は窮地に立たされると身分など関係なく同じことを考えるのか、人間の本質を鋭く暴いている。

- ³⁾ Charlotte Brontë は、*Jane Eyre* (1847) の冒頭に、“TO W.M. THACKERAY, ESQ THIS WORK IS RESPECTFULLY INSCRIBED BY THE AUTHOR.” と明記し、*Preface* でも、“Finally; I have alluded to Mr. Thackeray, because to him—if he will accept the tribute of a total stranger—I have dedicated this second edition of *Jane Eyre*” と記している。Brontë はそれまで Thackeray に一度も会ったことはなかったが、1851年、Thackeray が行った ‘The English Humourists’ という講演に参加した時初めて Thackeray に会ったとされている。
- ⁴⁾ 1833年「一般工場法」により、9歳未満の子どもの労働は禁止され、「穀物法」は、1846年に撤廃された。
- ⁵⁾ 18世紀から19世紀のイギリスについては、君塚直隆 (2018) 『物語 イギリスの歴史 (上)』、『物語 イギリスの歴史 (下)』、当時のロンドンの下層階級の生活については、寺西のぶ子 (訳) (2016) 『不潔都市ロンドン』、小林由果 (訳) (2017) 『ヴィクトリア朝英国人の日常生活 (上)』第7章を参照。
- ⁶⁾ 規範文法については、Tieken-Boon van Ostade (2006) *Eighteenth-Century Prescriptivism and the Norm of Correctness*, Tieken-Boon van Ostade (2008) *Grammars, Grammarians and Grammar Writing: An Introduction*, Nevalainen and Raumolin-Brunberg (2003) *Historical Sociolinguistics*, Tieken-Boon van Ostade (2011) *The Bishop’s Grammar* を参照。
- ⁷⁾ イタリアやフランスのアカデミーとは異なるが、イギリスでは、The Royal Society of London for Improving Natural Knowledge (科学的知識促進のための王立協会) が1662年に設立される。しかしながら、その主たる目的は科学の推進であり、言語政策は副次的な位置づけであった。事実、イタリアとフランスのアカデミーは設立後、辞書を出版しているが、王立協会の委員から様々な英語の改善を目的とした提案が出されたが実現はしなかった (林 1985 [1968]: 238-241)。アカデミー設立以外にも、山本 (2018: 162) は規範文法書誕生の要因の1つに17世紀イギリスが模範とした古典主義 (古代ギリシャやローマが推奨した合理性・秩序・均整などを重んじる主義) の社会への広がりや科学技術の発展を挙げている。このような動きが、当時のイギリス人に英語を論理的に秩序だとして正しく規定することの重要性を認識させることになったと論じている。
- ⁸⁾ Crystal (2018: 86) は、*Punch* (1841-1901) を分析した結果、最も多く登場する規範文法家として Lindley Murray の名前を挙げて次のような見解を示している。“... but evidently by the mid-nineteenth century, Murray was ‘the name’ for all matters of usage, regardless of whether the point is grammatical or not.”
- ⁹⁾ Phillipps (1978: 108) では、*The Newcomes* の1例のみ提示されている。
- (i) He said he never could forget the kindness with which the Colonel have a treated him. His Lordship have taken a young man, *which* Mr. Ridley had brought *him* up under his own eye, and can answer for him ... and *which* he is to be his lordship’s own man for the future. (*The Newcomes*, cited in Phillipps, 1978: 108)
- ¹⁰⁾ 関係代名詞には、制限用法と非制限用法があるが、本稿では Wright (1994: 260-261) に従って、関係代名詞の選択が最も顕著に現れる制限用法だけを分析対象とする。しかしながら、当時のテキストは現代と比べて必要以上に句読点 (punctuation) の多用が認められ、場合によってはその両者を区別することは困難である。先行詞の情報が補足的でない場合は、形式上コンマがあっても分析の対象とする。
- ¹¹⁾ Rawdon は子どもの頃から資産家の伯母 Miss Crawley の一番のお気に入り、約70,000ポンドの遺産の相続

人になっていたが、Becky と結婚したことで絶縁されてしまう。そこで、Becky が Rawdon に再び遺産相続人してもらうよう Miss Crawley へ謝罪の手紙を書くよう促す場面での会話である。Rawdon のスペルミスは Becky が正している。

(i) “You old booby,” Rebecca said, pinching his ear and looking over to see that he made no mistakes in spelling—“beseech is not spelt with an *a*, and earliest is.” So he altered these words, bowing to the superior knowledge of his little Missis. (VF: 247)

しかしながら、Miss Crawley は、この手紙を読んで Becky の差し金だとすぐ理解してしまう。何故なら、その手紙があまりにもスペルミスや文法ミスがない完璧なものであったので、Rawdon が書けるわけがないことを知っているからである。

(ii) He never wrote to me without asking for money in his life, and all his letters are full of bad spelling, and dashes, and bad grammar. It is that little serpent of a governess who rules him.” They are all alike, Miss Crawley thought in her heart. They all want me dead, and are hankering for my money. (ibid.: 247)

¹²⁾ Mr. Osborne は、自分の若い頃を振り返って次のような話を息子である George にしている。

(i) “My father didn’t give me the education you have had, nor the advantages you have had, nor the money you have had.” (VF: 202)

¹³⁾ Quirk et al. (1985: 1251) は、先行詞が最上級あるいは限定詞 *first, last, only* などに先行されている場合は、*that* または省略が好まれると記述している。

¹⁴⁾ Thackeray は、Amelia のことを次のように述べて、Amelia の naive な側面を否定的に提示している。This lady は Amelia を指す。

(i) This lady, I believe, ...was such a mean-spirited creature that—we are obliged to confess it—she could even forget a mortal injury. (VF: 664)

テキスト

Brontë, Charlotte (1999 [1847]) *Jane Eyre*, 2nd. ed., with an Introduction and Notes by John McRae, Penguin Books, London.

Lowth, Robert (1995 [1763]) *A Short Introduction to English Grammar*, 2nd ed., with an Introduction and Notes by David A. Reibel, Routledge/Thoemmes Press, London.

Murray, Lindley (1795) *English Grammar*, York.

Priestley, Joseph (2015 [1772]) *The Rudiments of English Grammar; Adapted to the Use of Schools; with Notes and Observations for the Use of Those who have Made some Proficiency*, 3rd ed., Sagwan Press, U.S.

Ridley, M. R. ed. (1961) *Vanity Fair*, Everyman’s Library, New York.

参考文献

Crystal, David (2018) “Punch as a Satirical Usage Guide,” *English Usage Guides*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 83-106, Oxford University Press, Oxford.

Gordon, Ray, N. (1955) *Thackeray The Uses of Adversity*, Oxford University Press, Oxford.

Harden, Edgar F. (1975 [1961]) *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray* Vol. I, Garland Publishing, Inc., New York/London.

Lewis, C.S. (2013 [1960]) *Studies in Words*, Cambridge University Press, Cambridge.

Melville, Lewis (2015 [1899]) *The Life of William Makepeace Thackeray* Vol. 1 of 2, Forgotten Books, London.

Nevalainen, Terttu and Helena Raumolin-Brunberg (2003) *Historical Sociolinguistics*, Routledge, London.

Oxford Advanced Learner’s Dictionary, 8th ed., (2010), Oxford University Press, Oxford.

- Phillipps, K. C. (1970) *Jane Austen's English*, André Deutsch, London.
- (1978) *The Language of Thackeray*, André Deutsch, London.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rissanen, Matti (1984) "The Choice of Relative Pronouns in 17th Century American English," *Historical Syntax*, ed. by Jacek Fisiak, 417-435, Mouton Publisher, Berlin.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner, eds. (2009) *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 20 vols., Clarendon Press, Oxford.
- Taylor, Theodore, ESQ (2018 [1864]) *Thackeray, the Humourist and The Man of Letters*, Hansebooks, Norderstedt.
- Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2006) "Eighteenth-Century Prescriptivism and the Norm of Correstness," *The Handbook of the History of English*, ed. by Ans van Kemenade and Bettelous Los, 539-557, Blackwell, Oxford.
- (2008) "Grammar, Grammarians and Grammar Writing: An Introduction," *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 1-14, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- (2011) *The Bishop's Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- (ed.) (2018) *English Usage Guides*, Oxford University Press, Oxford.
- Tillortson, Geoffrey and Donald Hawes (2014 [1968]) *William Thackeray*, Routledge, London/New York.
- Wright, Susan (1994) "The Critic and the Grammarians: Joseph Addison and the Prescriptivists," *Towards a Standard English 1600-1800*, ed. by Dieter Stein and Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 243-284, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Yáñez-Bouza, Nuria (2018) "Grammar Writing in the Eighteenth Century," *Patterns of Change in 18th-Century English*, ed. by Terttu Nevalainen, Minna Palander-Collin and Tanja Säily, 27-43, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- 林哲郎 (1985 [1968]) 『英語辞書の発達』開文社, 東京.
- 君塚直隆 (2018) 『物語 イギリスの歴史 (上)』, 『物語 イギリスの歴史 (下)』, 中公新書, 東京.
- 小林由果 (訳) (2017) 『ヴィクトリア朝英国人の日常生活 (上)』, 原書房, 東京.
- 寺西のぶ子 (訳) (2016) 『不潔都市ロンドン』, 河出書房新社, 東京.
- 山本史歩子 (2017) 「The Female Spectator の英語—関係代名詞を中心に—」近代英語協会『近代英語研究』第33号, 51-83.
- (2018) 「後期近代英語」『英語教師のための英語史』, 片見彰夫、川端朋広、山本史歩子 (編), 162-185, 開拓社, 東京.